

東京国税局管内納税貯蓄組合連合会優秀賞

税金がつなぐ命

多摩大学目黒中学校 三年

村野 莉々果

私は先日、映画「あの花が咲く丘で君とまた出会えたら」を観ました。この映画は戦争をテーマにっていて、結末はとても悲しいものでした。観終わったとき、私は戦争がどれほど多くの人を深い悲しみに追いやるのかを強く感じました。この作文では、映画を通して考えた「戦争と税のつながり」について書きたいと思っています。

この映画は、一人の女の子の体験を通して戦争の残酷さが描かれています。だからこそ私は、「戦争は、何万人が亡くなった」という数の問題ではなく、その一人一人の命や気持ちの重さを考えることが大切だ」と感じました。その人の人生は、唯一無二のかけがえのないものです。それを戦争は一瞬で奪ってしまうことが、悔しく思いました。

さらに、映画の終演後に行われたシネマトークショーで、私は今もなお世界で戦争が続いていることを改めて知りました。スクリーンに映し出されたのは、ウクライナなどの戦地で泣いている小さな子どもや大人の姿でした。写真を見たとき、私は「戦争は過去の出来事ではなく、今も現実起こっている」ということを

強く実感しました。そして、“何万人が苦しんでいる”という数字ではなく、“一人一人が流している涙の重さ”を思いました。戦争は今この瞬間も、かけがえのない人生を奪い続けているのです。

では、そんな悲しみを前にして、私たちのできることは何だろうかと考えました。その答えの一つが「税金を通じた海外支援」です。税金と、私たちは普段「学校、医療など身近な生活を支えるもの」と考えがちです。しかし、税金は国内だけでなく、海外で苦しむ人々を助けるためにも使われています。日本は国連やユニセフといった国際機関に支出をし、そこから食料支援や医療物資の提供、避難所の整備などが行われています。もし税金がなかったら、こうした支援は実現できません。涙を流す一人一人の苦しみを少しでも和らげるために、税金は確かに役立っているのです。

私はこのことを知って、「税金はただ取られるものではなく、人の命を支える力なのだ」と気づきました。たとえ遠く離れた国であっても、私たちが納める税金は誰かの命を守る力になっています。そう考えると、税金を納めることは決して無駄ではなく、むしろ未来や平和のための大切な投資だと思います。

映画を通して、戦争がどれほど一人一人の人生を奪うのかを知りました。そして税金による海外支援は、その苦しみを少しでも和らげる力になることも学びました。私は、税金を通じて平和のために自分も参加できているのだと考え、とても嬉しいのです。これからも戦争のない未来を願い、私たちに出来ることを、考え増やし続けたいです。今ある幸せを噛み締めて、一日一日を大切

に。